

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 79
2021年2月



コロナ時代のイスラエルの小学校授業風景

支援者の皆様

確定申告の季節が来ました。今年は私自身も受領証明書作成に携わりました。支援者お一人おひとりのお名前を確かめる中で、どれほど多くの方々が、私たちの理念に賛同して下さっているか、認識を新たにすることができました。20年以上毎月のように郵便局に足を運んで下さる方、里親として複数の子どもの援助をして下さる方……聖地の平和と子どもたちの幸せを願って支援して下さいる皆さまのお心がひしひしと伝わり、とても感動しました。

【教育こそ平和への確実な道】、このNPOの理念です。しかし「確実」ではあっても、一方で「遠い」道でもあります。それでも一步一步の前進を。皆さまのおかげで「継続は力なり」という言葉も思い起こされます。紛争に加えコロナの脅威にも曝される聖地の子どもたちに、引き続きあたたかいご支援を下さいますよう、お願い申し上げます。心からの感謝のうちに。事務作業の都合から寄附金受領証明書の送付が遅れご迷惑をおかけしました。確定申告期限は4月15日です。

理事長 井上 弘子 スタッフ一同



2020年11月、引き続き認定NPOと認められました

認定NPO法人

聖地のこどもを支える会



これは、JANICの「アカウンタビリティ・セルフチェック 2012」マークです。JANICの「アカウンタビリティ基準」の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）について当団体が適切に自己審査したことを示しています。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 Email ispalejpn@gmail.com TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

イスラエル、パレスチナの教育システム

ヤクブ・ガザウィ（当法人現地スタッフ）、アブダラ・アタラ（エルサレム連帯事務局）へのインタビュー（2月10日）から

新型コロナウイルス第三波の広がりにより、学校や大学をはじめ教育現場は大きな打撃を受けています。私たちは現在、二度目のロックダウン*にあり、昨年9月に再開した学校は再び閉鎖され、オンライン授業に戻ってしまいました。学校側も各家庭もオンライン学習を行う際に多くの課題に直面しています。

自宅学習は子どもたちの精神面でのストレスを助長し、勉強意欲が損なわれてしまう危険があります。成績の低下は避けられず、子どもたちにとっては学習を続けるモチベーションが下がってしまっているのです。

また、すべての教師がオンライン授業に対応できているわけではなく、特に年配の教師はオンライン教育に必要なITツールや技術への適応が難しい状況です。そして、子どもたちの両親の中には失業に追い込まれて仕方なく家にいる人や、仕事のシフト数を減らされて収入が以前より大幅に減少した人が多数います。そんな家庭の事情があっても、学校側は十分なサポートができないため、両親は授業料をなんとか払うために苦労しています。子沢山の家庭では、すべての子どもにコンピューターやタ



自宅でオンライン授業を受ける小学生

ブレット等の機器を与えることはできません。IT機器をきちんと扱えない家庭すらあります。インターネット接続は、特にヨルダン川西岸とガザ地区で大きな問題となっており、安定した接続は得られていません。子どもたち、学校、両親との間には苛立ちが募り、こうして悪循環が引き起こされていくのです。政府や教育省は最善を尽くしていると言いますが、教育現場での困難は山積みで、まだまだ改善の目途は立っていません。

一日も早く、パレスチナ側へもワクチンが行き渡り、イスラエルとパレスチナの双方において感染が収まるよう、そして子どもたちが学校にて教育を受けられるように、と望むばかりです。

*このロックダウンは、2月14日に解除された。

できることを真剣に、そして楽しく

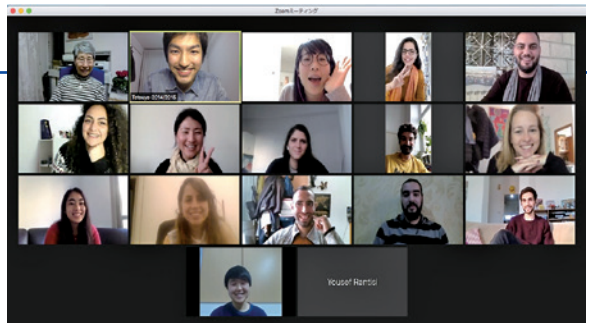
高橋 彩子（スタディツアー参加予定者、大学2年生）

私は、「どうしても現地に行って自分の目で見たい」という思いで、2020年3月のスタディツアーに申し込みました。きっかけは、2019年夏に「平和の架け橋プロジェクト」に参加したことです。紛争問題などに興味があるとはいえ、大した知識も関わりもなかったのもので、まずは現地の人と繋がりを持つことから始めようと考えて、プロジェクトに参加しました。プログラムを通して、イスラエル、パレスチナからの参加者に、彼の地の魅力を教えてもらったり、日本の報道で得られる情報は切り取られた一部で、またかなり偏っているということに気づいたりした結果、プロジェクトが終わるころには、絶対に現地に行きたいと思うようになっていました。

しかし、そんな思いもむなしく、新型コロナウイル

スの感染拡大によって、スタディーツアーは延期とになってしまいました。1年が経とうとする今も、いつ行けるのかわからない状態です。

コロナ禍で残念な思いをしたり、苦しんだりしている方は世界中にたくさんいるはずですから、弱音ばかり言っていられないのですが、正直、申し込んだのにに行けないのはとても残念でした。また、私を含む参加予定者の多くがイスラエル・パレスチナについて知りたいという気持ちを維持することに難しさを感じたと思います。しかし、せっかく興味がある人が集まったのだから、イスラエルやパレスチナについて一緒に学び、いつか行くことができれば、その時には多くのものが得られるようにと、月に一度オンラインで勉強会を開催することにしました。



ツアーの延期が決まった時点で辞退した方もいますし、1年もすると状況が変わり、途中で抜ける方もいました。しかし予定者全員でなくとも、できるメンバーで励ましあって、この1年間学びを続けてきました。これまで、みんなで決めたテーマについて各自で学習をして共有したり、現地の参加予定者とオンラインで交流したり、現地に詳しい方からお話を伺ったりしてきました。最近ではパレスチナを舞台にした映画鑑賞をし、それについて意見交換をしました。他にもイスラエルやパレスチナで有名な料理

パレスチナとパンデミック

鈴木信一神父（聖パウロ修道会司祭）（当法人の青少年国際平和交流事業 第1回（2005）、第2回（2007）、第3回（2009）に深く関わってくださいました）

トランプにかわってバイデンがアメリカ大統領になりましたが、前大統領はとても大きな負の遺産を残しました。不信と分断、その根底にあるフェイクです。彼が繰り返し主張した大手メディアに対する不信感は着実に根付き、街にはフェイクという言葉があふれました。その結果、国民は共通の基盤を失い、みな自分が正しいと信じる情報に基づいて判断し、対立し合うようになりました。一方は相互理解と和解を呼びかけますが、他方はおのれの正しさを主張し、相手に対する不信感をあらわに表現します。これで和解と一致は可能でしょうか？

アメリカの分断と相互不信を見ていて私は思うのです。トランプが油を注いだ不信と分断は、まさしくパレスチナの状況だと。トランプはエルサレムを首都と認めることによってパレスチナの分断と不信に油を注ぎました。トランプはアメリカで行ったのと同じことをパレスチナにおいても行ったのです。この意味で彼の主義主張は一貫しています。

今、アメリカで起こっている不信と対立、そして和解への呼びかけは、パレスチナの世界では70年以上前から続けられています。70年たっても和解が生まれていないということは、いったん生じた亀裂の修復がいかに困難なものであるかを雄弁に物語っているように思えるのです。不信と分断とフェイクを乗り越えない限り、平和は到来しません。

コロナはアメリカ社会の弱者を直撃しましたが、

を作ってみるという、楽しそうな計画もあります。

日本で、しかもオンラインで私たちができる事には限界がありますが、限界があるからと投げ出してしまうのではなく、これからもできることを真剣に、そして楽しく続けていこうと思います。



イスラエルの病院の集中治療室（コロナ患者の治療をしている）

それは日本もパレスチナも同じです。経済的な弱者、国籍による弱者、民族による弱者、職種による弱者、性別による弱者、年齢による弱者、宗教による弱者など、様々な弱者はどの国にも存在します。労働力として受け入れられていた日本の国籍を持たないたくさんの外国人労働者、小さな子供を抱え、社会的、経済的に弱い立場に置かれた母子家庭、様々な病気やハンディキャップ、また障害とともに歩んでいる人々や共同体など……。コロナは私たちに、この社会が決して平等ではないこと、むしろどれほど不公平な痛みを抱えた社会であるか、普段見落としていた現実を気づかせました。

パレスチナにおいてはパンデミックの前から社会は分断され、強き者の正当性が主張され、相互の不信感があおられ、社会的、経済的、政治的不平等が押し付けられていました。ここにパンデミックが加わり、弱者はますます弱者として生きよう追

い込まれています。

弱い立場にある者がさらに脆弱な立場に置かれていくのはどの国においても共通する現実です。こうした世界的現実の中であって、私たちはどのように行動すべきなのかが問われています。私たちの活動の精神は、弱い立場に置かれた人たちを無視し

ない心を持つこと、関心を持って、ともに歩もうとすること、自分にできることは何かと真剣に考える思いから生まれるはずのものです。

イエス様の人生は、そういうお心に貫かれていたのだろうと想像します。イエスのような行動がどこまで真似できるか、問われている気がします。

「えっ、また!」「えっ、15年ぶり!」それぞれに総選挙

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

「また」はイスラエル。なんと、2年の間に4回目の国会議員選挙が、この3月に実施されることになりました。汚職裁判の被告であるネタニヤフ首相の続投にイエスカノーかが問われます。「15年ぶり」はパレスチナ。自治政府のアッバス議長が、パレスチナ住民にとっての国会に相当する自治評議会の選挙を実施する議長令を出しました。地理的に分断されたヨルダン川西岸地区とガザ地区は政治でも分裂しており、選挙によって分裂を解消できるのかが問われますが、そもそも選挙が実施できるのかさえ不透明な情勢といわれています。

前回の選挙ではハマスが勝利

イスラエルによる占領からの解放を掲げてゲリラ闘争を続けていたパレスチナ解放機構（PLO）とイスラエルが、オスロ合意に基づいてパレスチナ暫定自治協定を結んだのが1993年9月。自治政府ができたのは翌年の5月でした。そして、自治評議会の選挙が96年1月に実施されました。筆者はエルサレムに駐在していましたが、投票日の20日はひどく寒い日で、西岸にはめずらしく大雪が降ったのを思い出します。

投票は西岸、ガザ、それにイスラエルが「不可分のイスラエルの首都」と宣言している東エルサレムでもありました。東エルサレムは当時、ユダヤ人入植地による浸食がまだそれほどではなく、パレ

スチナ人居住地域であることがはっきりしていました。それでもイスラエルとの接点が多く、ヘブライ語を話せる住民は多くいました。若者をつかまえて取材した時のこと、筆者はアラビア語が話せない、相手は英語が苦手。試しにヘブライ語で質問したら話が通じたという体験をしたものです。

この選挙では、PLO主流派でイスラエルを承認したファタハが88議席中55議席を獲得して勝利し、同時に行われた自治政府議長選挙でもファタハのアラファト議長が選ばれました。しかし、この評議会は任期がはっきりしないまま10年間改選されず、2006年1月にやっと2回目の選挙が実施されました。この時は改定された定数132議席のうち、前回ボイコットしたイスラム教原理主義組織ハマスが74議席を得て第1党となったのです。自治政府を牛耳っていたファタハは、縁故採用や汚職による不人気もあって45議席に落ち込みました。

ハマスについては折に触れ伝えてきましたが、1987年末に発足、主張の一つに「イスラム教徒にとっての聖地パレスチナを占拠しているイスラエルから解放するために、全パレスチナ人はジハード（聖戦）に立ち上がるべきだ」というのがあります。そして実際に軍事部門が自爆テロなどを実行していました。そのハマスが2006年の選挙で過半数の議席を獲得し、ファタハとの連立内閣に参加して首相を出したのです。

ところがパレスチナを援助する欧米諸国など



アッバス議長＝アルジャジーラ電子版より

が、ハマスがイスラエルの承認、暴力の放棄などを約束しない限りハマスが参加する自治政府への資金援助を減らすか打ち切る、と警告したのです。自治政府で故アラファト議長の後を継いでいたアッバス議長は2007年、非常事態を宣言し、ハマスを排除した内閣をつくりました。国際社会に受け入れてもらえるファタハによる政府をつくった形です。これに対しガザ地区で優勢なハマスは、実力でファタハを追い出してガザを支配。ファタハの西岸、ハマスのガザという現状ができてしまいました。

住民に信頼されない自治政府

分裂という異常事態のもと、パレスチナ自治区では選挙権が行使できない状態が続いてきました。これでは自治政府の正統性も失われてしまいます。そんな中で、米トランプ政権から極端にイスラエル寄りの施策を打ち出され、パレスチナ側の存在感は薄れるばかり。最近では、パレスチナを圧迫しているとしてイスラエルを非難していたはずのアラブ諸国から、イスラエルと関係改善に踏み切る国が出てきました。こうした状況を打破しようと、ファタハとハマスが選挙実施で合意した結果、アッバス議長の議長令となったのです。7月には議長選も実施、と発表されています。

民主的に選ばれた自治政府をつくり、国際社会に対し政治の正常化をアピールする好機です。しかし、西岸の現地情報では、選挙への期待は盛り上がっていないようです。「指導部は汚職だらけ」

との不信感が強く、ファタハでもハマスでもない第3の党が欲しいとの声があるとのこと。また、イスラエルにより封じ込められているガザでは、新型コロナの感染拡大と経済の疲弊で、選挙に期待するところではないかもしれません。

ところで、パレスチナ自治政府が将来の国家の首都としている東エルサレムのパレスチナ人の選挙権はどうなるのでしょうか。現在はイスラエル化が進み、イスラエルから市民と認められているパレスチナ住民は投票すれば罰せられます。一時的居住権しか持たない自治区民には投票権があるものの、投票するなら自治区内へ出かけてこっそり権利を行使するしかないそうです。

争点は「ネタニヤフ是か非か」

イスラエルの選挙については2019年2月号で、4月に前倒しで実施と書いて以来、19年9月、20年3月と、1年の間に3回も総選挙がありました。そして3回目の選挙では、ネタニヤフ首相追い落としを公約に掲げていた中道会派「青と白」代表のガンツ氏が、連立交渉の結果「コロナ禍への対処が最優先」だとして、ネタニヤフ氏と挙国一致の連立政権を選んだのでした。そんな挙国一致内閣が、コロナが鎮静化する前に崩壊したのです。

理由は、予算案が議会通過期限の20年12月22日までに承認されず、自動的に内閣総辞職、国会解散となったからです。今年3月23日に投票されます。今度の選挙でも、安定した連立政権をつくれるような結果が出るという見方はほとんどない中、選挙の争点については「ネタニヤフ首相の続投是か非か」という見方がもっぱらです。

首相在任期間の最長記録を更新中のネタニヤフ氏は、熱烈な支持者の間で根強い人気を保っています。一方で、パレスチナ和平を推進した故ラビン首相を、パレスチナ過激派による爆弾テロの責任者だと糾弾して右派・和平反対派を取り込

んだ扇動政治の手法に対する強い反発もあります。汚職の噂が絶えない政治家としての資質への批判も強く、反対派からは嫌悪感すら抱かれ、支持派からは崇拜ともいえる感情で迎えられる様は、まるで米国前大統領が巻き起こしたトランプ現象のよう。

世論調査では、ネタニヤフ氏が率いる右派リクードが国会（定数120）で30議席前後を得るとの見通しです。リクードからは、ネタニヤフ氏との党内権力争いに敗れたサアル氏が新党「新たな希望」を設立、この党が15議席前後を得るとの調査結果が出ています。これに対し前回はリクードに迫る勢いを見せた中道会派の「青と白」は4、5議席予想と、見る影もありません。全体に

左派が退潮、右派が伸長する傾向です。これは、イデオロギー的な選択が理由なのではなく、「ネタニヤフ氏を追い落とせるならだれでもいい」という選択の反映、との見方があります。ちなみに、サアル氏はパレスチナ国家との二国家共存による和平には反対を表明しています。

ところで、在イスラエルの80歳代の知人から来た年始便りに、対コロナのワクチン接種をした、とありました。去年12月中のことですから、英国や米国で接種開始が大きく報じられた陰で、イスラエルでは脚光を浴びることもなく接種が進んでいたわけです。今年1月1日時点で100人当たり接種率が11.55%と世界1だったとか。ネタニヤフ首相は、ワクチン供給の米ファイザー社に

イスラエル・パレスチナを考える こんな映画はいかが♪

紛争地でのさまざまな思いが込められた作品をご紹介します。＊作品の画像はいずれも予告編から



『パラダイス・ナウ』

監督 ハニ・アブ・アサド／2005年制作
フランス・ドイツ・オランダ・パレスチナ合作／90分

イスラエル占領地ナブルスで暮らす2人のパレスチナ人青年が自爆テロへ向かうまでの48時間の葛藤や友情を描いた衝撃作。

2006年度ゴールデングローブ最優秀外国語作品賞など数々の賞を獲得したが、第78回アカデミー賞外国語映画部門にノミネートされた際には、自爆テロ被害者の遺族たちからノミネート取り下げの署名運動が起きるなど大きな波紋を呼んだ。



『歌声にのった少年』

監督 ハニ・アブ・アサド／2015年制作／パレスチナ／98分

パレスチナ・ガザ地区出身の歌手、ムハンマド・アッサーフの半生を映画化。

紛争の絶えないガザ地区に暮らし、「スター歌手になって世界を変える」ことを夢見るムハンマド少年は、姉ヌールと2人の友達とバンドを組み、ガザの町で歌っていた。弟の声が「最高」だと信じる姉のヌールが立てた「カイロのオペラハウスに出る」というとてつもない目標を目指し、結婚パーティなどのステージで演奏を披露。ムハンマドの美声は聞く

接種に関する統計情報を提供していると明らかにし、「集団免疫に向けた世界の実験室として貢献できる」と語っています。ワクチン対策を主導しているとして、選挙を前に存在感のアピールを忘れて

ていません。

双方に民意を反映できる政権ができ、和平交渉再開に希望の光を見いだせるのか、注目しましょう。

認定NPO法人聖地のこどもを支える会の 会員になりませんか？

さまざまなプロジェクトをはじめ、教育支援事業など、当会の活動を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員 個人 年額 12,000円／1口
学生 年額 6,000円／1口

賛助会員 年額 6,000円／1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- * 毎回 郵便局へ払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます！

お申込み・お問合せは
当法人事務局 **03-6908-6571**
または **042-636-9218** (中山)

者たちを魅了したが、姉の立てた目標は、思わぬ形で終わりを迎えてしまう――。



『もうひとりの息子』

監督 ロレーヌ・レビ／2012年制作／フランス／90分

兵役のための健康検査の結果、両親の実子でないことを知ったイスラエル人の青年……。

イスラエル、パレスチナの新生児が避難の際に取り違えられたことが18年たって明らかになり、それぞれ築いた家庭のアイデンティティが、大きく揺さぶられる。対立関係にある国の家族、根深い憎しみからの解放と希望を描く。

第25回東京国際映画祭で、東京 サクラ グランプリと最優秀監督賞の2冠に輝いた。

いずれも【アマゾン・プライムビデオ】などの会員制動画配信サービスで鑑賞できます。

東京・新宿武蔵野館ほか順次全国で公開

『天国にちがいない』

監督 エリア・スレイマン／2019年制作／フランス／102分



イスラエル国籍のアラブ人、エリア・スレイマン監督が自身を演じ、監督も務めた作品。新作映画の企画を売り込むため、スレイマン監督は故郷のナザレからパリ、ニューヨークへと旅に出る。パリではおしゃれな人々や美しい街並みに見ほれ、ニューヨークでは映画学校やアラブ・フォーラムに登壇者として招かれる。行く先々で故郷とは全く違う世界を目の当たりにするスレイマン監督。そんな中、思いがけず故郷との類似点を発見……。

パレスチナへの無理解を風刺、笑いと詩的映像で描き出す独特の世界。2019年カンヌ国際映画祭で特別賞と国際映画批評家連盟賞を受賞。

人の消えた街



▲テルアビブ高層ビル街もほとんど無人。「マスクを着用して!」電光掲示板だけが目立つ。



▲ロックダウン中のエルサレム新市街。



▲人影が全くないベングリオン国際空港。

コロナに負けるな



▲幼い子どももPCR検査。



▲ユダヤ教超正統派の医師によるワクチン接種（キッパと呼ばれる黒い小さい帽子で分かる）。



▲聖ヨゼフ学院でのクラス風景。「密をさけてマスクを着けよう!」



▲ロックダウン中に外出する人がいないか見張っている警官。

街で出会ったこどもたち



写真撮影 Sr.ララ（エフエタ聴覚障害児学院）、ダリーヌ・ラマ、ヤクーブ・ガザウィ、クレール・ガザウィ